

フィレンツェ *Firenze*

街に残る ルネサンスを先駆けた 建築家の足跡

まちあるきの考古学



フィレンツェは、小高い山々に囲まれた盆地にあります。街を見下ろせる丘からの眺めで、最も印象に残るのは、ドゥオーモ(大聖堂)の圧倒的な存在感です。

周りの建物を従えるかのように、悠然と、そして気高く構えています。その存在感は、ほかを圧倒する大きさだけではなく、クーポラ(円蓋)の優美さが創りだしていると思います。

周りの建物には一定の秩序があるように感じられます。優美なクーポラに合わせるように、パーミليون(銀朱)とよばれる、少しくすんだ赤色の屋根瓦をのせています。また、どれも3~5階建ての石造建築ですが、そこに重厚感はなく、むしろ貴婦人のような柔らかな上品さが感じられます。

ドゥオーモの優美さは、フィレンツェの街並みの規範になっているようです。

街のかたちを整ったのは、13世紀末から15世紀半ばまで、約150年の間です。ゴシックからルネサンスへの過渡期にあたります。

長く続いた都市間戦争と内部権力闘争に終止符が打たれてから、メディチ家が台頭するまでの間、フィレンツェがまさに共和国であった時代でした。

その時代、フィレンツェの街の形を創りだした、2人の天才建築家がありました。

一人は、ゴシックからルネサンスへの橋渡しをした アルノルフォ・ディ・カンピオ
もう一人は、時代に先駆けてルネサンスを先導した フィリッポ・ブルネレスキ

今回のまちあるきは、フィレンツェの街に残る、2人の天才建築家の足跡を探すことにします。

街のかたちに残る フィレンツェの歴史

フィレンツェは古代ローマの植民都市を起源にしています。

植民都市は長方形、碁盤目状の街路構成で、市壁に囲まれていました。

2つの街道が交差する場所に、市民広場（現共和国広場）がありました。共和国広場周辺の街路だけが碁盤目状になっているのは、ローマ植民都市の名残りなのです。

ポンテ・ベッキオは、フィレンツェで最も古く、ローマへの街道が通る橋でした。

橋はアルノ川の幅が最も狭い場所にあります。最も架橋しやすい場所に橋が架かり、橋を守るための砦が築かれ、砦が発展してフィレンツェの街になったのかも知れません。

それから約1000年後、フィレンツェの街は大きく発展していきます。

12世紀初頭、伯爵領主の死後、街はコムーネ（自治都市）として独立すると、すでに市壁の外側まで広がっていた市街地を収容するよう、市壁の拡張が始まります。

中世のフィレンツェは、ほかのトスカーナの都市と同じく塔の乱立する街でした。

貴族達が一族の権勢を誇示するために、塔を競い合って建築したのです。

13世紀末、対外戦争と内紛に明け暮れた貴族達を、織物産業の隆盛により台頭した大商人が抑え込み、共和国体制が固まると、都市の再拡張と改造の時代が始まります。

貴族達が無秩序に建てた塔は撤去され、新たな建物は高さが規制され、フィレンツェは秩序あるルネサンス都市に生まれ変わっていったのです。

そして、街の拡大に伴って市壁の第2次拡張が始まります。この時期に共和国政府から招聘されたのが

建築家 アルノルフォ・ディ・カンピオ でした。

いまのポンテ・ベッキオは、2階建てで、1階には宝石店が軒を連ねる。この橋は街のヘソとして、数多の変遷を経てきた。 ⇒



街中には、乱立していた塔の撤去された跡が残っている。 ⇒



ローマ時代の植民都市の名残が、いまの碁盤目状の街路構成にみられる。 ⇒



ローマ植民都市 市壁

ルネサンス都市の統括デザイナー アルノルフォ・ディ・カンビオ



パラッツォ・ベッキオ

新たな政庁館（現パラッツォ・ベッキオ）は、政争に敗れた旧貴族の館を取り潰して建設されました。支配層の交代を象徴する建物です。

硬質砂岩の粗面仕上げによる威圧感をもつ要塞型パラッツォには、新たな共和国フィレンツェの自信と権威が表れています。

街の再拡張と改造とともに、共和国政府が取組んだのが、新たな大聖堂と政庁館の建設でした。先行するピサやシエナの大聖堂建設に触発され、これを凌ぐ大聖堂の建設が始まります。この大事業のため、建築家カンビオがローマから招聘されたのです。

「重要な建物で、彼の意見を聞かないで決められたものは、何一つなかった」と、同時代の建築家は記録しています。カンビオは、変貌するフィレンツェの都市建設統括デザイナーとして、活躍したと推測されます。

新たな大聖堂（ドゥオーモ）はカンビオの手によりマスタープランが描かれました。政庁館（現パラッツォ・ベッキオ）の設計者は明確には分かっていませんが、大聖堂と同時期に着工していることから、カンビオの手によるものと考えられています。

こうしてフィレンツェは、カンビオの影響力のもと、塔の乱立する混沌とした中世の街から、秩序のある芸術的なルネサンス都市への生まれ変わっていったのです。



大聖堂

カンビオの死後も大聖堂の建設は延々と進められます。

数多くの設計者が彼の後を次々と引き継いだため、当初プランがどのようなものであったか、分かり難なっていますが、その基本形状は現在のものと変わっておらず、ローマ・カトリックの教会建築としては当時世界最大のものだったと考えられています。



大聖堂 内部

都市に優美さを求めた フィリップ・ブルネレスキ



アンヌンツィアータ広場からの
軸線上みえる大聖堂クーポラ

後年のミケランジェロは、クーポラを前にこう呟いたといわれています。
「これほど大きくは造れても、これほど美しくは造れない。」
彼はフィレンツェを凌ぐバチカン大聖堂の設計者として知られています。

13世紀末に着工した大聖堂は、カンピオの死後も営々と続き、15世紀初旬には、円蓋(クーポラ)を残し概ね完成しますが、その大空間に屋根を架けることが残された最後の難題でした。それを解決したのが フィリップ・ブルネレスキ です。

彼は、仮枠を設けない2重構造のドームを考案し、床から足場を組むことなく屋根を架けたのでした。彼の功績は、巨大空間に屋根を架けた技術だけでなく、ため息がでるほどの美しいクーポラに仕上げたことです。

ブルネレスキは、都市に優美さを求めた、最初の人だと思います。

それは、彼の設計した捨子養育院の配置計画とファサードデザインにも表われています。養育院の面するアンヌンツィアータ広場を回廊で囲むよう構想し、広場をクーポラからの軸線上に配したのです。後のバロック時代につながる近世都市デザインの萌芽を感じます。

その構想は後世に引き継がれ、100年後には対面する修道院に、さらに100年後には隣の教会にも、同じデザインの回廊が付け加えられました。ブルネレスキのマスタープランは200年後に完成をみたのです。
回廊は半円形のアーチを細い円柱で受けとめ、アーチの直径と円柱の高さを1:1にするという、単純明快な構成が、軽やかで優しい印象をかもしだしています。



捨子養育院



捨子養育院のファサード

子供を育てられない事情をもつ母親たちが、胸の痛みをこらえながら赤子を捨てに来る場所、それが捨子養育院です。
当時の公共建築物は威圧的でした。
しかしブルネレスキは、建物正面を厳めしい石貼り鉄扉とはせず、優しいアーチの開放廊下にして、心に傷を持つ母親を暖かく向かい入れるような構えにしました。

広場は外部空間にも関わらず、教会の内陣のような、神の慈悲が届きそうな 空間となっています。

まちあるきの考古学

近くのまちあるき [ナポリ](#) [シエナ](#)